

出題分析			
試験時間	120分	配点	150点
		大問数	4題
分量（昨年比較）	[減少 同程度 増加]	難易度変化（昨年比較）	[易化 同程度 難化]
<p>【概評】</p> <p>〈現代文〉大問一は『あらわれを哲学する 存在から政治まで』の第5部「ともにある」第14章「喪失という攪乱—死別を中心に」からの出題だった。大問二は『歴史と理性と憲法と—憲法学の散歩道2』の「科学的合理性のパラドックス」からの出題だった。</p> <p>大問一では「死別」という人間にとって避けられないテーマを、大問二では「社会科学と法律学」の見方の違いを具体的かつ明快に論じた文章であり、受験を超えて大学での学びにもつながる良問であったと考える。</p> <p>〈古文〉『海道記』からの出題だった。ストーリーと主人公の心情はシンプルなものであるが、生と死をめぐる仏教的世界観を本文と注釈から把握したうえで解答すると、より全体をとらえた深みある解答が可能になるだろう。</p> <p>〈漢文〉</p> <p>本文の分量は昨年から約40字増加。昨年と同じく、設問数は4、解答数は8。近年頻出の書き下し文問題が出題されなかったものの、本文のジャンルや設問で問われている学力は概ね例年通りであったといえる。</p>			

設問別講評			
題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
一	現代文 「喪失という攪乱— 死別を中心に」 中真生	漢字の書き取り4つ。内容説明3問。全体の要旨に関する内容説明1問。 例年7つ問われていた問一の漢字の書き取りが4つになった。 問二～問四は各段落の要旨を把握していくと自然と解答要素が浮かび上がる素直な設問で、基本的な読解力がそのまま得点力の違いとなる。 問五は全体の論旨を十分に反映させるには字数制限が厳しく、取舍選択が求められる。 いずれにせよ、死別を経験した人が経験するジレンマの内容を具体的に把握できた受験生が高得点を得られるだろう。	標準
二	現代文 「科学的合理性のパ ラドックス」 長谷部恭男	内容説明4問。理由説明1問。大問一と比較すると設問の要求に一ひねり加えられており、出題意図に正確に答えることが重要である。 前半は「理由」と「効用」という似た2つの言葉が対比され、後半では「学者個人にとっての効用」という視点が新たに導入されて論じられており、混同を避けて読み進められたかどうか勝負を分ける。	標準

設問別講評			
三	古文 『海道記』 中世 紀行文	現代語訳 3 問。内容説明 3 問。 問一の現代語訳は基本的な単語、慣用表現ではあるが、文脈にそって訳出することを心がけたい。 筆者の立場は明示されていないものの、明らかな仏教観にもとづいて記述されているため、本文中の仏教観を踏まえたうえで解答していきたい。そのうえで、死を目前とした宗行の心情を捉えたと問二～問四いずれも解答しやすいだろう。	標準
四	漢文（志怪小説） 祖沖之『述異記』	材木に化け、人に捕えられた怪物が、不思議な能力を使って逃げようとする話。標準レベルの漢字の知識および文脈の中で解釈する力が必要。 語句の読み 1 問（解答数 5）、内容説明 1 問、現代語訳 1 問、本文全体の内容説明 1 問の構成。	標準

合格のための学習法

〈現代文〉

文章の構造を的確にとらえ、さらに語句の意味をもとにして考えることを日ごろから心がける。段落ごとのポイントを押さえ、それらをつなげて全体の要約をしていく練習が効果的である。合わせて、傍線部に使われている語の意味を意識して答えることも必要である。

〈古文〉

高校一年で学ぶ文法事項を理解し、確実なものとして定着させる。重要単語は教科書や単語集を用いて、粘り強く覚えていく。一語一語の働きがわかり、一文ずつ逐語訳できることが文章全体の理解につながる。十分な演習量を確保し、解答のスピードアップを図りたい。

〈漢文〉

まずは訓読の基礎となる重要語や句法を確実に習得しよう。その際、表現を丸暗記するのではなく、実際の文中でどのように用いられているかに注意し、文脈に応じてわかりやすく訳せるようにしておきたい。また頻出の 75 字記述問題の対策として、200 字程度の漢文を要約する訓練を積んでおくとよいだろう。